

はじめに

数十年継続してきた本共同研究「多民族社会における宗教と文化」は、不安定な国際状況を複数の専門領域の知見を総合し分析することを旨としてきたが、本年度はその方法論としての縦軸・横軸の言語化に資する成果が並び立った点に大きな意義がある。縦軸は、被災・差別・地域格差・紛争といった不安定の要素をめぐる叙述とその行為であり、横軸は叙述の方法論の検証である。交通事故被害者遺族による講演、「能登に生き、能登の街をつくる」、そして「〈経験を書く〉とは？」や「アジアの社会変容と女性」といった企画は、叙述の具体とその多声性を示す場となったように思う。

とりわけ重視されたのは、不安定の渦中を生きる当事者に語りを依頼し、その声をいかに受け止めるかという枠組みそのものを問い返す姿勢である。あらかじめ結論へと回収することを避け、語りの揺らぎや逡巡を含めて記録する態度は、複数の語りが並び立つ場において、叙述の方法それ自体を可視化する契機となったのではないだろうか。こうした実践は、研究内容のみならず研究手法を内側から照射し、両者が相補的に機能する構造の可能性に、一石を投じたように思われる。

また本号が、本研究会を長年にわたり中心的に牽引してきた八木祐子氏の退職記念シンポジウム開催の年の刊行となったことは、感慨深い。氏は、卒業生の中から第一線で活躍する研究者たちとともに、長年の研究成果を『変容するジェンダーの人類学 現代アジアでしなやかに生きる』（菅野美佐子・八木祐子編、明石書店、2026年3月）として結実させた。本号に掲載されたシンポジウム開催報告と併せて、ご覧いただければ幸いである。

以上の成果を踏まえ、本号『多民族社会における宗教と文化』（第29号）をここに刊行する。本号には、地域における語りの生成と流通に関わる実践的研究も含まれており、叙述の内容と方法を往還する本研究の到達点を示すものとなっている。

今年度開催された本研究会主催の企画を以下に記録しておく。

〈共同研究「多民族社会における宗教と文化」主催研究会〉

◆第一回グリーンケア公開講演会「命の大切さを学ぶ教室」

2025年6月20日（金）16時20分～17時50分（＝本学講義館2階C203教室）

企画・司会 浅野晴哉（本学心理行動科学科准教授）、松本周（本学一般教育部教授）

報告 命の大切さを学ぶ教室 あなたはママの自慢の子

佐藤早織氏（犯罪被害者遺族 宮城県警察「命の大切さを学ぶ教室」講師）

◆第二回グリーンケア公開講演会

2025年11月25日（火）16時30分～17時50分（＝本学大学講堂）

企画・司会 松本周（本学一般教育部教授）

報告 能登に生き、能登の街をつくる

森山奈美氏（株式会社御祓川 代表取締役社長）

◆公開シンポジウム

2026年1月9日（金）16時30分～17時50分（＝本学講義館4階C403教室）

企画・司会 永田貴聖（本学現代ビジネス学科教授）

企画タイトル 「経験を書く」とは・・・

金村詩恩氏（著述家）

中島弘象氏（ノンフィクションライター）

指定質問 間瀬幸江（本学一般教育部教授）

◆共催研究会

2026年1月23日（金）～24日（土）（＝宮城県大崎市鳴子温泉郷）

企画立案 市野澤潤平（本学現代ビジネス学科教授）

企画タイトル 宮城の観光振興と女子観光人材育成

◆公開研究会

2026年2月10日（火）16時20分～17時50分（＝本学図書館第一セミナー室）

報告 「心の声」と「自由話法」—イメージ・文学・言葉—

阿部宏（本学人間文化学科教授）

◆八木祐子先生定年退職記念 公開シンポジウム『アジアの社会変容と女性』

2026年2月21日（土）9時30分～12時（＝本学第二講義館K302教室）

企画・司会 八木祐子（本学学芸学部人間文化学科教授）

第一部 基調報告「北インド農村の社会変容と女性—40年の時をこえて」

八木祐子（本学人間文化学科教授）

第二部 「タイのジェンダー—交差する差異と不平等」（木曾恵子氏）

「ベトナムの女性たち—方法論としてのライフストーリー」（伊藤まり子氏）

「ネパールの女性と儀礼—社会的経験は変わったか?」（工藤さくら氏）

「インドの村の女性たち—より良い暮らしを求めて」（菅野美佐子氏）

なお私事にわたるが、この共同研究は、文学研究を専門領域とする本号の編者にとって、領域横断型の研究の新たな可能性を模索する道場であった。文学に軸足を定めつつも、あえて教育実践やフィールド研究の領域へ踏み出そうとがいた過去10年近くにわたり、理念的ゆりかごであったこの共同研究に、謝意を表明する。

ホルムズ海峡封鎖の原因ならびに今後の動向を注視しつつ

2025年度共同研究代表 間瀬幸江